

採点番号(事務局記入)

2021 年度 建築基礎設計士補試験

基本問題 (2022 年 4 月 17 日実施)

受験番号	
フリガナ	
氏名	



(2 ページ以降には、氏名等を書かないこと)

一般社団法人 基礎構造研究会
建築基礎設計士試験運営委員会

A 1 : 訂正問題

採点番号(事務局記入)

次の文章の下線部が正しければ解答欄に「○」を、誤っていれば解答欄に正しい語句等を記入しなさい。

(配点：40点、各4点)

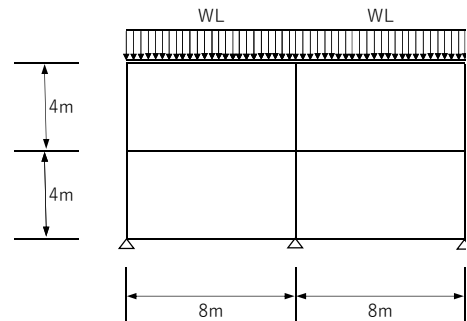
例：2021年のアメリカ大リーグで二刀流として活躍し、MVPを獲得したのはベーブ・ルース選手である。

解答欄	大谷翔平
-----	------

1. 標準貫入試験の際に得られる試料を用いて、室内試験の力学試験を実施することができる。

解答欄	
-----	--

2. 右図に示すラーメン架構に積雪荷重 $WL=3\text{kN/m}$ が作用するとき、すべての梁に作用するせん断力の合計は 48kN である。



解答欄	
-----	--

3. 表層地盤の地震の増幅特性を等価線形化法 (SHAKE) により算定する場合、地盤のひずみ量に注意する必要がある。

解答欄	
-----	--

4. 連続基礎底面までの土被り厚さ D_f が基礎の左右で異なる場合、支持力算定では左右の平均 D_f を用いて算定する。

解答欄	
-----	--

5. 正方形平面のべた基礎の場合、沈下の影響圏は基礎幅の深さまでと考えてよい。

解答欄	
-----	--

6. 急速載荷試験は、現在では反力体慣性力方式が主流になっている。

解答欄	
-----	--

7. 日本建築学会「建築基礎構造設計指針」では、終局限界状態時の引抜き抵抗力として最大引抜き抵抗力を採用している。

解答欄	
-----	--

8. セメント系地盤改良の設計において、東京都の構造設計指針では接地圧の上限を設定している。

解答欄	
-----	--

9. 土の含水比は、土中の水の重量を土の重量で除した値で、一般には%で表記する。

解答欄	
-----	--

10. 連続梁の交互のスパン内にピン節点を配置した静定梁をゲルバー梁という。

解答欄	
-----	--

A 2 : 穴埋め問題

空欄に入る数値や語句等を解答欄に記入しなさい。

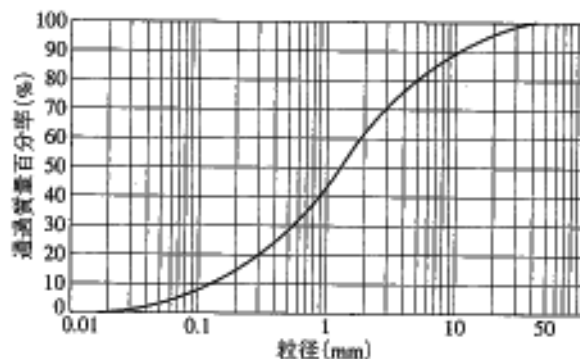
1. ある土の試料を粒度分析した結果、粒径加積曲線は下図のようになった。この土の礫分・砂分・細粒分は、それぞれ約

(①) % ・ (②) % ・

(③) % となる。この土は地盤工学会の土質分類法では、(④) に分類される。また、均等係数 U_c と曲率係数 U_c' を求めるとそれぞれ約 (⑤) ・

(⑥) となることから、粒度分布は (⑦) と判定される。

(注：⑤と⑥は、計算の過程も明記する。)



(配点：7点、各1点)

解答欄	①	
	②	
	③	
	④	
	⑤	
	⑥	
	⑦	

2. スクリューウエイト貫入試験（スウェーデン式サウンディング試験）は、主に小規模建築物に対する支持力調査として用いられており、荷重 W_{sw} (kN) と回転により (①) cm 貫入するのに必要な半回転数 N_a (貫入量 1m あたりの半回転数 N_{sw} に換算) を求める。なお、 N 値との関係については、稲田による提案式として砂質土の場合、 $N=2W_{sw}+$ (②) N_{sw} 、粘性土の場合、 $N=3W_{sw}+$ (③) N_{sw} が示されている。

(配点：3点、各1点)

解答欄	①	
	②	
	③	

3. 湾岸地域などの埋立地の軟弱地盤では、およそ1万年前までの第四紀（①）世に堆積した沖積層が分布していることから、基礎設計のために十分な地盤調査が必要となる。緩い砂質土地盤では、液状化の検討として一般的にN値による簡易判定を行うため、粒度試験により（②）を求めておく必要がある。なお、液状化判定の対象となる地盤は、原則として地表面下（③）m以浅の土層や②が（④）%以下の土層などである。

（配点：4点、各1点）

解答欄	①	
	②	
	③	
	④	

4. N値20、細粒分含有率30%、有効上載圧98kN/m²の砂層に対して液状化判定を行う場合、補正值N値増分が（①）、補正N値が（②）となり、飽和土層の液状化抵抗比と補正N値の関係（せん断ひずみ振幅を5%）より、（③）領域に属するため、この地盤は液状化（④ 選択：しやすい、しにくい）。

（配点：4点、各1点）

解答欄	①	
	②	
	③	
	④	

5. 建設予定敷地において、ある深さに層厚Hが1.0mの薄い粘性土層を介在していたので、この粘性土層から体積Vが1,600cm³の試料を採取し、炉乾燥させたところ重量Wsが2,000gとなった。土粒子の比重Gsを2.50とすれば、この試料の土粒子だけの体積Vsは（①）cm³、および間隙比eは（②）となる。一方、当敷地に直接基礎で支持する建物を建設すると、この粘性土層のeが0.85となることが判明した。この粘性土層の圧密沈下量Sは（③）mmと推定される。

（配点：3点、各1点）

解答欄	①	
	②	
	③	

6. 昭和 10 年に (①) 成形による円形中空の RC 杭が製造され始めたが、(②) が生じやすいという問題があった。この問題の対策として、(③) 強度や (④) 強度を高めた PC 杭が昭和 37 年に開発された。次いで、昭和 45 年頃に高温高压養生することや (⑤) を添加することによってコンクリート強度 F_c を (⑥) N/mm^2 以上に高めた PHC 杭が開発されたが、この主な目的は肉厚を薄くして重量を軽くすることにより (⑦) を削減するためであった。現在では、鉛直支持力の増大に対応するため、コンクリートの長期許容圧縮応力度が (⑧) N/mm^2 となる $F_c=105N/mm^2$ の PHC 杭が主流になっている。

(配点：8 点、各 1 点)

解答欄	①	
	②	
	③	
	④	
	⑤	
	⑥	
	⑦	
	⑧	

7. 地盤工学会基準では、鉛直載荷試験方法として a 押し込み試験、b 先端載荷試験、c 引抜き試験、d 鉛直交番載荷試験、e 急速載荷試験、および f 衝撃載荷試験の 6 種類の試験方法が基準化されている。以下の各項目に該当する試験法すべてを記号で記入しなさい。

- ① 動的な荷重を加える試験
- ② 反力装置が不要な試験
- ③ 上向きの荷重を加える試験
- ④ 載荷時間が 0.1 秒以上の試験

(配点：4 点、各 1 点)

解答欄	①	
	②	
	③	
	④	

8. 締固工法の改良効果は、改良対象層の (①)、(②)、(③) に影響される。改良後に行う事後の調査ボーリングは、通常、施工から (④) 週間程度経過後に行われる。

(配点：4点、各1点)

解答欄	①	
	②	
	③	
	④	

9. セメント系地盤改良工法では、一般的に改良対象土が (①) の場合、(②) の溶出試験が求められる。溶出基準値は (③) mg/l である。室内配合試験において溶出基準を満足しなかった場合、(④) 固化材の使用が必須となる。

(配点：4点、各1点)

解答欄	①	
	②	
	③	
	④	

10. 物体が外力により変形するとき、(①) までは応力 σ ~ ひずみ ε 関係が比例 (線形) 関係にあり、この時の比例定数を (②) という。一方、小さな応力から比例 (線形) 関係を示さない土などの物体では、最大応力の (③) での σ ~ ε 関係点と原点を結ぶ (④) を比例定数として解析に適用し、この比例定数を (⑤) と呼称している。

(配点：5点、各1点)

解答欄	①	
	②	
	③	
	④	
	⑤	

